いのちと地域を守る

投票で集団移転を決定

ラユン村

アチェ州の州都バンダアチェ市から西に25キロ離れたラユン村で24日に開いたむすび塾では、海辺の小屋を会場に、現地の住民8人が被災後の集団移転や生活再建の課題を話し合った。被災前の集落のまとまりを守って暮らしているが、収入の回復には個人差があるという。

スマトラ沖地震の際は入り江の漁村に最大35メートルの津波が襲い、住民950人のうち204人が犠牲になった。被災後、住民たちは海から約1キロ離れた山沿いの低地に集団移転した。

進行役の木村理事長は「津波から8年以上がたち、復興の課題が見えてきたと思う。いろいろ教えてほしい」と、住民たちに呼び掛けた。

村は集団移転の成功例として知られる。被災後、村を離れバンダアチェ市などで避難生活を送った住民たちも「村に戻りたい」との声が強く、住民投票で集団移転を決めたという。

住宅は非政府組織（NGO）が2年ほどで163戸を完成させた。「移転先は3集落ごとに区分した」「みんなが同じ規格の家になり、貧富の差が見えにくくなったのは良かった」。住民はコミュニティーを大切にした暮らしぶりを語った。

移転後は海沿いにある住居跡地を「養魚場」として活用し、新たな収入にもつなげていた。

生業の再建には、ばらつきがある。村の主産業は漁業で、イワシなどの干物を作る。震災前に200隻あった漁船は25隻しか回復していない。加工場など共同施設の再建も遅れている。

漁船と漁獲量が減ったことで「魚価が上がって収入が増えた」との声がある一方、「（生業に対する）政府の復興支援が少ないから、時間がかかっても自力で船を再建するしかない」という嘆きも漏れた。

国全体は年6％前後の経済成長を続ける。傍聴していた自治体関係者らに、木村理事長は「好調な経済を追い風に、本格的な復興を果たしてほしい」と求めた。

避難路を確保する問題も話題になった。住民が集団移転した場所は津波浸水域にある。「政府から予算が出ない」（住民）ことを理由に、いまも高台への避難路は造られていない。

語り部の一人で、東松島市貝田行政区長の中山勝文さん（68）は「災害は忘れたころにやってくる。地震が起きたらすぐに動き出せるように、みんなで話し合ってほしい」と住民に語り掛けた。

スマトラ沖地震から8年の歩みを踏まえ、復興の課題を話し合うラユン村の住民とむすび塾の一行。漁船の前に集う漁師の顔には、仕事への誇りと喜びがあふれている

■むすび塾に参加して

全住民の投票で、半分以上が戻りたいという意見だったので集団移転を決めた。住宅が1カ所にまとまったことに満足している。移転先にも津波が来た。高台への避難路はまだないので、みんなバラバラに逃げてもらうしかない。

＝村助役・ブルハヌディンさん（48）

津波で子ども2人が亡くなり、店や車2台、漁船2隻が流された。漁船1隻を新たに造って漁に出ているが、収入は被災前の半分ぐらい。漁師仲間が減ってしまったのが残念だ。

＝元村長・ハアブトゥラさん（62）

集団移転して住民みんなが同じ家になり、貧富の差が見えなくなって良かった。家族で漁をしており（漁船と漁獲量が減って）津波の前より魚の金額が上がった。収入が増えたのはうれしいね。

＝ズーラさん（38）

減災・復興支援機構（東京）

木村　拓郎理事長に聞く

遺構の保存意義を確認

スマトラ沖地震から8年がたった被災地で、日本が学ぶべき教訓とは何か。防災ワークショップ「むすび塾」の進行役を務めた減災・復興支援機構の木村拓郎理事長に、現地住民とのワークショップや視察の感想について聞いた。

◇

―被災後8年の現状をどう見るか。

「住民がいまも津波への危機感を強く持っていることに安心した。被災後の生活はようやく『復旧』の段階が終わったという印象だった」

―復興はこれからだということか。

「政府や非政府組織（NGO）が提供した住宅は傷みがひどく、住宅再建の時期に来ていると感じた。漁業など生業の回復も遅れていた。むすび塾を開いたラユン村では津波浸水域に集団移転しながら、高台への避難道すらできていなかった。経済成長を追い風に、防災教育や避難道整備を計画的に進めてほしい」

―教訓を伝える取り組みはどう映ったか。

「家族で被災体験を語り継いでいるようだ。スマトラ島の西に浮かぶシムル島では、約100年前の津波が子守歌や叙事詩によって伝えられ、津波時に住民が避難できた。災害伝承の重要性を示している。ただ、現地では風化が始まっているようにも映った」

「行政と住民が協力し、被災した住宅や漁船など『災害遺構』を数多く保存している点は特筆すべきだ。国内外から観光客も訪れ、伝承と経済再生の両面で保存意義を確認できた」

―時間の経過とともに見えてきた課題は。

「高台移転した集落では『仕事場の漁港まで遠い』という理由で津波浸水域に再移転する住民が増えていた。建物をNGOなどが高い家賃で借り上げるなどして、震災富裕層が生まれ、貧富の差も広がっていた」

―来年はスマトラ沖地震から10年、東日本大震災から3年を迎える。

「日本の復興はハード重視だが、アチェ州の集落を訪ねると、隣近所のコミュニティーを大切にして復興の活力にしている姿が印象的だった。節目に当たり、両国の住民が知恵を共有する場をぜひ増やしてほしい」

「今回訪問した中学校では、津波避難を呼び掛ける歌をつくり、歌いながら長縄跳びをするアイデアを提案した。地域に減災文化を定着させる手法を生み出すことも、日本、インドネシア両国共通の課題だろう」

きむら・たくろう　東北工大卒、長崎大大学院博士後期課程修了。97年に社会安全研究所を発足。10年に一般社団法人減災・復興支援機構を設立し現職。専門は市民防災学、災害社会学。石巻市出身。64歳。

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

語り部から

東松島市の貝田行政区長　中山　勝文さん（68）

高台への避難 習慣化を

アチェの人々は被災前、教訓はおろか、津波自体を知らなかった。過去に津波が来なかったために逃げる意識が低く、大勢の命が失われた。

東日本大震災で私は、東松島市の自宅周辺で避難を呼び掛けながら友人宅2階に逃げ、辛うじて助かった。

両方の地域に必要なのは、大きな地震があればすぐ高台に避難するという習慣だ。現地の住民に避難の準備を求めながら、津波災害を後世に伝え続けなければと身が引き締まった。

避難が空振りになることも多い。100回逃げて100回津波が来なくても、101回目も逃げてもらいたいと思う。

訪問先のバンダアチェ市の上水道普及率（35％）がようやく被災前の水準に戻ったと聞いた。本格的な復興にはまだ時間が掛かるのだろう。

視察先で出会った子どもたちの瞳がとてもきれいだった。子どもたちのことを第一に復興を遂げてほしい。

大崎市の水難学会指導員　安倍志摩子さん（51）

つらい思い 分かち合う

東日本大震災では東松島市野蒜の自宅で津波に襲われた。夫とともに津波に流され、鳴瀬川を7キロ上流までさかのぼったところで助かった。

ムラクサ地区で開いたむすび塾で、体験を話した。現地の女性も、涙ながらに津波のことを話してくれた。別れ際にはギュッと抱き締められた。「苦しみやつらい思いも、みんなで分かち合えばきっと乗り越えられる」。そんな思いを強くした。

訪問先では貧富の差を感じることもあった。仕事がないと、困難を乗り越えるきっかけをつかめないのではないか。「生活再建が途上の人は防災・減災を考える余裕はない」という現地専門家の言葉も、心に残る。

災害遺構が数多く残ることに驚いた。日本は明治三陸大津波や昭和三陸津波、チリ地震津波を経験しているが、それでも多くの犠牲が出た。過ちを繰り返さないよう、後世に語り継ぐ大切さをかみしめている。

多賀城市の東北学院大3年　渡辺　英莉さん（21）

被害の伝承 重要性理解

アチェで出会った人々は津波で家族が3人も4人も犠牲になった人ばかりだった。つらい思いを抱えながら、みんな底抜けに明るく過ごしていることに、胸を打たれた。

東日本大震災では、宮城県七ケ浜町の自宅近くの避難場所で、一緒に逃げていた祖父母とともに津波にのまれた。祖母を失い、守れなかった自分を責めてばかりだった。

むすび塾で住民に心情を打ち明けた。イスラム寺院のおさから「あなたはアチェの家族です」と慰められた。自分だけがつらい思いをしているんじゃない。大切なことに気付かされた。

津波を後世に伝えようと、アチェでは被災した建物や漁船が数多く残っていた。わたしは震災後、被災地で津波の跡を見るのが嫌だった。「つらくないですか」と住民に尋ねると「100年後の人々があなたと同じ思いをしてもいいのですか?」と問い掛けられた。その方が嫌だ―。考えが変わった瞬間だった。